雑誌『太陽』の漢語副用語と和語副用語の比較*

趙 英 姫**
(e-mail: yhee0410@ggu.ac.kr)

目　次

1．はじめに
2．調査方法及びデータの集計
3．雑誌『太陽』の文体の性格と副用語の特徴
4．漢語副用語と和語副用語の分類と比較
4.1 文の重層的構造と関連づけた副用語の分類
4.2 文の重層的構造と関連づけた漢語副用語と和語副用語の分類と比較
4.2.1 事柄の副用語
4.2.2 状況の副用語
4.2.3 陳述の副用語
5．和語副用語との比較から見た雑誌『太陽』の漢語副用語の性格
5.1 〈証拠付け〉の陳述の副用語
5.2 〈まとめ〉の陳述の副用語
5.3 〈断定〉の陳述の副用語
5.4 雑誌『太陽』に特徴的に見られる漢語副用語の性格
6．まとめ

1．はじめに

一般に知られているように、漢語の日本語への流入は古くから行われていたが、幕末・明治期に西洋の新しい文明を受け入れる過程で中国語からの借用や造語などの方法で大

* 이 논문은 2009년도 금강대학교 교비연구비 지원사업에 의해 연구되었음
** 금강대학교 통상통역(일어)전공 전임강사
www.kci.go.kr

量の漢語が日本語に流入された。その結果、本来固有語の和語でまかなわれていたところに漢語はそれなりの位置を占め、今や和語とほぼ同等の位置を占めるようになっている。従来の漢語研究は漢語の出自や漢語による翻訳語、和製漢語の研究の類など、漢語が日本語に流入される過程を究明するものが中心であった。それに対して、山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(1940) のように日本語の文を構成する成分としての漢語の性質全般について論じたものがなくはないが、日本語の構文成分としての漢語の性質について論じた研究はそれほど盛んではなかった。個々の漢語の意味・用法を扱った論文は多いが、漢語の動詞、形容詞、形容動詞などを正面から取り上げ、その性質を論じた研究は少ない。

本稿は日本語の構文成分としての漢語の性格を明らかにしたいという問題意識から出発している。漢語は文中で和語の助辞がついて（助辞がつかない場合も含め）いろいろな構文成分となるが、構文成分としての機能の特徴をとらえやすいという理由で漢語副用語に注目する。趙(2002) (2003) (2008) の一連の研究では近現代における漢語副用語の性格をテーマに、以下の考察結果をまとめた。趙 (2008)では、近現代語形成期1)の主な作品から漢語副用語を採集・集計し、当時の漢語副用語の使用状況を量的に概観した。趙 (2002)では、近現代語形成期の小説の漢語副用語を対象に、会話文にのみ出現するもの、地の文にのみ出現するもの、会話文と地の文両方に出現するものに分類し、漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性について指摘した。趙 (2003)では、漢語副用語を文中での修飾機能によって分類した際、漢語副用語の出現形態と修飾機能との間に関連性が見られることを指摘した。

これらの研究は近現代の漢語副用語の性格の一端を明らかにしたものの、漢語副用語そのものにだけ焦点を当てたという問題点があった。漢語副用語の性格の究明は、もう一方の構文成分である和語副用語との比較が欠かせない。本稿では、和語副用語との比較を通じて近現代の漢語副用語の性格を究明するための切口として雑誌『太陽』(1901)の漢語副用語と和語副用語を比較し、近現代の漢語副用語の性格の一端を明らかにすることを目的とする。本来ならば、趙 (2008)で作成した形成期のデータ2)の全作

1) 近代語と現代語の時代区分については諸説があるが、東京語を中心にした時代区分説として、松村明(1954、p.87)を参考とした。松村は明治前期〔形成期〕（明治の初年から明治十年代の終わりまで）、明治後期（確立期）（明治二十年代の初めから明治の末年まで）、大正期〔完成期〕（大正の初年から大正十二年九月の大震災まで）、昭和前期〔第一転成期〕（大正十二年の関東大震災後から昭和二十年八月の終戦まで）、昭和後期〔第二転成期〕（終戦後から今日まで）に分類している。本稿では、明治期から昭和期に至る東京語を中心とした流れを「近現代語」としてひとまとまりのものとして捉え、その始めと終りのそれぞれ約20-30年を「近現代語形成期」と「近現代語完成期」としている。

2) 形成期のデータとは、言文一致期以降明治末期までの教科書（延べ語数：637、異なり語数：102）、啓蒙書（延べ語数：736、異なり語数：166）、小新聞（延べ語数：1399、異なり語数：233）、雑誌『太陽』(1901) （延べ語数：1761、異なり語数：378）、小説（延べ語数：4009、異なり語数：553）の漢語副用語のデータを一つにしたもので、その集計は延べ語数8542、異なり語数859である。

品から和語副用語を採集し、比較すべきであるが、本稿ではそれの初歩的な調査として雑誌『太陽』(1901) を取り上げる。

2．調査方法及びデータの集計

雑誌『太陽』（博文館）は、1895（明治28）年1月1日から1928（昭和3）年2月1日まで刊行された総合雑誌である。雑誌『太陽』は当時他誌に比べて桁違いの部数で発行され、刊行期間も19世紀から20世紀にわたり一世代以上に及び、まさに時代を代表する雑誌であった[3]。多様なジャンルの記事で構成され、幅広い読者層を持っていたことから、当時の日本語の実態をうつしだした資料としての価値が認められる。本稿の調査は、国立国語研究所編『太陽コーパス-雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社、2005）の1901年[4]の各号の記事のうち口語体の記事[5]を対象に、漢語副用語と和語副用語を採集した。記事は、歴史、技術工学・工業、社会科学、産業、文学、自然科学、哲学、芸術の多様な分野の著者が書いたもので、ほとんどが論説調のものである。以下に、本稿で対象とした『太陽』（1901)の各号を示す[6]。

第7巻 1号(1901. 1)　第7巻 2号(1901. 2)　第7巻 3号(1901. 3)
第7巻 4号(1901. 4)　第7巻 5号(1901. 5)　第7巻 6号(1901. 6)
第7巻 8号(1901. 7)　第7巻 9号(1901. 8)　第7巻10号(1901. 9)
第7巻12号(1901.10)

次に、本稿で使っている副用語の定義について示しておく。一般に、副用語は副詞を含む広い概念を指すものである[7]。それを「副詞」の代わりに「副用語」と称するのは、狭義の副詞には入らないいわゆる形容動詞の連用形や時間副詞、数量副詞を含む広い

3）上野隆生(2007、p.252)を参考にした。

4）国立国語研究所編『太陽コーパス-雑誌『太陽』日本語データベース』は、1895（明治28年)、1901（明治34年)、1909（明治42年)、1917（大正6年)、1925（大正14年)の各年、計60冊に、終刊年の1928年（2号で終刊）の2冊を加えた62冊の本文のうち、原著者の著作権上の問題がある記事を除いた全文を対象としたものである。そのうち、1901年の記事を選んだのは、形成期のデータが言文一致期（明治20年)から明治末期(明治45年)までの期間を対象としており、1901年（明治34年)の記事は、ちょうどその真ん中の時期に当たるからである。

5）趙（2008)で作成した形成期のデータは、言文一致期以降明治末期までの口語文の文章を対象としているため、『太陽』（1901）も口語体の記事のみを対象とした。

6）国立国語研究所（2005、p.18)によるが、欠落した7号と11号については特に言及されていない。

7）『国語学大辞典』に副用語は次のように定義されている。「要するに主語・述語となり得ず、従って助詞・助動詞を従えることも活用することもなく、単独で文中の他の要素との関係を構成する職能を有する品詞の集合体。副詞・連体詞・接続詞・感動詞の連合体と言ってもよい。」（『国語学大辞典、p.748、渡辺実執筆)

捉え方をするからである。なお、考察の際には雑誌『太陽』の漢語副用語以外に、必要に応じて形成期のデータに触れることがあることを断っておく。雑誌『太陽』以外の形成期のデータのテキストの作品は論文の末尾に示した。

考察の対象となる漢語副用語とは、正確には語基の部分に1単位以上の字音形態素を含み、単独または和語の助辞が結合した形で文のなかで連用修飾的成分になるものを指す。語基と助辞という用語を使っているのは、語を構成する単位としての漢語を形態素レベルで考えるのが有効だとみる立場に立っているからである。語基と助辞の定義は野村雅昭(1998)に従った8)。和語の場合、連用修飾的成分の大半は形容詞・形容動詞の連用形で占められているが、その量が膨大であるため今回のデータではこれらは除いて採集した。また和語の擬音語・擬態語は量が膨大で、複数の語形があるのも少なくないので『三省堂国語辞典第六版』に見出し語または小見出し語となっているものだけを対象とした。用例の引用に際しては字体は通用の字体を用い、原文のふりがなは必要な部分だけを残し、省略した。以下に、雑誌『太陽』(1901)から漢語副用語と和語副用語を採集したデータの集計を示す。

表1　雑誌『太陽』(1901) の漢語副詞用語と和語副用語のデータ9)

	漢語副用語	和語副用語
延べ語数	1761	2924
異なり語数	378	266

3. 雑誌『太陽』の文体の性格と副用語の特徴

雑誌『太陽』では、和語副用語の大きな部分を占める擬音語・擬態語が非常に少ないという特徴が見られる。以下は、雑誌『太陽』のデータの擬音語・擬態語の全例を示したものである。

かつかつ	がつがつ	こつこつ	ごろごろ	しろじろ
ちゃんちゃんと	どしどし	どんどん (と)	のこのこ	ぺらぺら
ほそぼそ (と)	ぼつぼつ	ぼんやり		

8) 野村雅昭(1998)では語を分析してえられる意味をになった最小の言語単位である形態素の下位分類として「語基」「接辞」「助辞」があり、語基…語の意味の中核となる形態素、接辞…語基と結合してしか語の成分となることのできない形態素、助辞…語基と結合して語基を文の成分として機能させる形態素と定義されている。(野村雅昭、1998、pp.136-137)

9) 漢語副用語の集計にはいわゆる形容動詞の連用形も含まれているが、これを除いた集計は延べ語数1620、異なり語数246となる。

www.kci.go.kr

たとえば、形成期のデータの作品のうち小説の場合『野菊の墓』1作品で全25例の擬音語・擬態語が使われており、小説作品に比べて雑誌『太陽』の擬音語・擬態語が顕著に少ないことがわかる。また、雑誌『太陽』の和語副用語には「豈」「いささか」「いつぞや」「苟くも」「況や」「けだし」「こいねがわくは」「よしや」など、文章語的な副用語が使われている。

［01］然し余は冀くは斯かる便利なる服装なれば、一日も速かに其流行を望むのであるが、世の中のことは斯く柄子定規で当て左様に旨く行くものでない。（田口卯吉「風俗改良問題（其二）」、『太陽』第7巻10号、1901.10）

雑誌『太陽』の文章は、形成期のデータのほかの作品の日常語的な文章と違って、その内容が書き手の抽象的な思考内容が中心となっているため、物事を感覚的に表現する擬音語・擬態語が少なく、硬い文章語的な言い方が多いと見られる。

雑誌『太陽』の文体的な特徴は、接辞的字音形態素「的」を含む漢語副用語が多いことにも表れている。「的」を含む語について山田厳(1983）には、発生期における状況が記されている。それによると、明治十年前後でも「的」を含む語は使われていたが、それは中国の俗文と同じ用法のもので現在の接辞的字音形態素「的」の用法とは異なり、使用される場面も限定的であり、一般的には使われていなかったという（山田厳(1983）、p.242）[10]。山田厳(1983)には「的」が現在のような用法で使われるようになった状況について次のことが述べられている。

（前略）的ということばは、以上の用例の出典からもわかるように、当時の学者階層に用いられたものであり、人文科学に属する翻訳書あるいは論文だけでなく、自然科学のものにも使用されていることに注意しなければならない。当時の学術書は、日本人の著作であれ、翻訳書であれ、当時の習慣に従っておおむね漢文書き下しの硬い文体の文章であった。的ということばも多くは硬い文体の文章のなかにもちいられている。当時のいわゆる小新聞は、俗文体あるいは、談話体で書かれているので、かたい感じを与える的ということばは、ほとんど用いられていない。（後略）（山田厳、1983、p.245）

形成期のデータには、「的」を含む語は異なり語数で雑誌『太陽』の例が21例、小説に13例が見られるが、啓蒙書と教科書、小新聞には1例もない。小説と雑誌『太陽』に見られる「的」を含む語には以下のようなものがある。

感情的に　機械的に　形式的に　根本的に　精神的に
絶対的に　先天的に　直覚的に　平和的に　論理的に

小説の例は地の文に使われたものが多く、会話文の例は4例であるが、その話し手は当時の若い知識人である。例［02］は小説の会話文の「的」の例であるが、その会話は

10）初稿の出典は『言語生活』120号(1961），筑摩書房

www.kci.go.kr

日常的なものではなく、話し手が聞き手に対し演説調に語るものである。

[02] 「（前略）なるべく通俗的に引き直して佳人淑女の眷[けん]顧[こ]に背かざらん事を期する訳でありますが、これからは少々力学上の問題に立ち入りますので、勢[いきおい]御婦人方には御分りにくいかも知れません、どうか御辛防を願います」（夏目漱石、『吾輩は猫である上編』、1905、p.177）

「的」を含む副用語が多いことのほか、形成期のデータのほかの作品には見られない「議院政治実施後（は）」「国家経綸上」「山林経営上」「数十年来」「生存競争上」「日清戦争後」など四単位以上の長い単位の漢語が見られるのも雑誌『太陽』の文体が硬い文章語的なものであることを裏付けるものと言えよう。

4．漢語副用語と和語副用語の分類と比較

4.1 文の重層的構造と関連づけた副用語の分類

趙(2003)では、はたらく文の階層に注目し、漢語副用語を事柄の副用語、状況の副用語、陳述の副用語に分類した。その内容を簡略に示すと、日本語の文は話者が伝えようとする客観的な事実である命題と、それを外側から包む形で存在する話者の主観を表す陳述という二つの大きな階層に分けられる。命題はさらに、事柄（述語あるいは述語にかかる格成分との組み合わせ）と事柄を取り巻く外的な状況である〈時〉〈場所〉〈原因〉〈理由〉などを示す部分に分けられる[11]。そして日本語の文における事柄、状況、陳述のどの層ではたらくかによって漢語副用語を事柄の副用語、状況の副用語、陳述の副用語に分類したわけであるが、この分類は和語の副用語の分類においても有効であると考えられる。4.2以下では漢語副用語と和語副用語を文の重層的構造と関連づけて分類し、両者の比較を行う。ちなみに、4.2以下の考察内容は雑誌『太陽』をテキストにした小規模の調査から得られた結果であり、あくまでも大まかな傾向をつかむのが主たる目的であることを断っておく。

4.2 文の重層的構造と関連づけた漢語副用語と和語副用語の分類と比較

4.2.1 事柄の副用語

事柄の副用語には〈様態〉〈程度〉〈量〉〈時間的進行の様子〉の意味・用法のものがある。以下は、事柄の副用語を意味・用法別に分類したものである。

11）『国立国語研究所』(1963、p.75)では、文の成分を「述語」「主語」「連用修飾語—(a)目的語(b)補語(c)連用語(d)状況語」「陳述的成分」「独立語」「句の扱い」に分けているが、それを参考にした。

www.kci.go.kr

〈和語の事柄の副用語〉

〈様態〉	色々　がつがつ　そそくさと　どしどし…
〈程度〉	極めて　甚だ　もっと
〈量〉	数多　大方　多く　ほとんど
〈時間的進行の様子〉	追々

〈漢語の事柄の副用語〉

〈様態〉	円滑に　簡潔に　厳然として　累々と…
〈程度〉	充分　随分　大層　大変　非常に
〈量〉	一切　悉皆　大体　沢山
〈時間的進行の様子〉	次第に　次第次第に　徐々に　漸次　段々

事柄の副用語の多数を占めるのは〈様態〉を表すもので、和語の副用語には擬音語・擬態語が多く、漢語の副用語には「円滑に」「熱心に」のような、いわゆる形容動詞のものと、「厳然として」「累々と」のようなタリ活用のものが多い。〈時間的進行の様子〉とは、次の例［03］の「段々」のように、時間の経過のなかで動きが進行する様子を表すものである。

［03］そこで若し肉類を多く喰べればイツマデも肉食為して酒飲まば段々亡気で腑抜けとぞなるで何時迄も肉食をしたり酒を余り沢山飲みますと仕舞には亡気たり腑抜となり病気になつて斃れて仕舞ふのである（石塚左玄「食物養生法に就て」、『太陽』第7巻10号、1901.10）

〈時間的進行の様子〉の比較では、和語は「追々」しか見当たらないが、漢語の副用語は「次第に」「徐々に」など和語副用語に比べると種類が豊富である。

4.2.2 状況の副用語

〈和語の状況の副用語〉

〈場所〉	—
〈側面〉	—
〈蓋然性〉	—
〈事態発生までの時間量〉	いきなり　今に　すぐ　にわかに　ようやく

www.kci.go.kr

〈事態継続の時間的長さ〉	ずっと　しばらく
〈頻度〉	重ねて　しきりに　たびたび　常に　時々　また
〈時〉	今　今日　今朝　さっき　近頃　昔

〈漢語の状況の副用語〉

〈場所〉	胸中　世界中　船中
〈側面〉	経済上　財政上　　哲学上　人情上…
〈蓋然性〉	大概（は）　大抵（は）　通常　普通
〈事態発生までの時間量〉	急に　忽然　到頭　突然　不意に
〈事態継続の時間的長さ〉	一生涯　永遠に　当分（は）
〈頻度〉	往々　始終　数回　頻々と　毎度　毎日…
〈時〉	近年　現在　今後　将来　先年　翌日…

〈時〉は一般的に副用語の分類のカテゴリーの一つであるが、〈場所〉は一般的な副用語の分類のカテゴリーとは言いがたい。〈場所〉を表すものは雑誌『太陽』の上記の3例のほか、形成期のデータでも「海上」「四面」「城中」「全日本中」が全例で、分類カテゴリーを設けるほど用例数が十分とは言えない。ところが、漢語副用語の〈場所〉を表すものには、「世界中」「全日本中」のように接辞的字音形態素「中ジュウ」を含むものがあり、これは和語の副用語とは異なる漢語副用語特有の特徴なので、分類カテゴリーとして独立させておく。

〈側面〉を表すものは、以下の例［04］のように後続の事柄内容が成立する〈側面〉を限定するものである。

［04］我財界に対し若し斯の方針を採らずんばこれ独り民間経済界の困難を来すのみならず、延て政府も亦財政上頗る困難の位地に陥るのであります。（渋沢栄一「現下の経済界に対する所見」、『太陽』第7巻4号、1901.4）

例［04］で「頗る困難の位地に陥る」ことは「財政の面において」そうであるという意味で、「財政上」は後続の事柄内容が成立する側面を限定している。雑誌『太陽』の〈側面〉を表す漢語副用語の例は、全部接辞的字音形態素「上ジョウ」を含むものである12)。接辞的字音形態素「上ジョウ」は、少数の例を除いては「経済」「国防」

12）「（前略）私の方では毎々お噂を伺つて、能く貴方を存じてをります。極潔いお方なので、精神的に傷いたとこ

www.kci.go.kr

「国家経綸」「財政」「哲学」など主に抽象的で専門的な人間活動を意味する語基と結合し、ある事柄内容の〈側面〉を限定する副用語を構成する。形成期のデータで〈側面〉を表すものは、小説に「御一身上」「職務上」「生存上」「法律上」の一部の例が見られるほかは、雑誌『太陽』に集中的に使われている。抽象的で専門的な人間活動の語基と結合しやすいことから、日常語の文章よりは文章語的な文章に適しているからだと考えられる。

上記の分類では、〈時〉を表す副用語は和語副用語に比べて漢語副用語がより多様である。ただし、これは雑誌『太陽』という限られたデータから言えることなので、おおざっぱではあるが、分類語彙表の「1.1641現在」の項目の和語副用語と漢語副用語を比較して見た。「1.1641現在」に分類されている語は合計47語あるが、混種語「今シーズン」を除いては和語が12語、漢語が34語で漢語が多い。例えば、「1.1641現在」の和語「今日」と意味的に対応する漢語には「当世」「当節」「現世」「当代」「今生」があり、種類が多い。和語「今年」と意味的に対応する漢語には「今年」「当年」「本年」があり、複数である。もちろん、日本語の〈時〉を表す表現は〈時〉の副用語以外にもありうるが、少なくとも副用語に限って言えば、和語副用語より漢語副用語が種類が豊富であると言える。

〈蓋然性〉のものは、後続の事柄内容の成立可能性を限定するものである。

[05] 細菌にも形状が同一様で誠に能く似寄つてゐて、而も、種類を殊にするものが沢山ある、たとへば、腸窒扶斯桿菌と、普通大腸菌と称する桿菌とが互に相酷似するが如き是なりぢや、（後略）（著者未詳「ウィダール氏反応及びグラム氏法」、『太陽』第7巻4号、1901.4）

〈蓋然性〉を表すもので、「大概（は）」「大抵（は）」は例［06］のように、直前に来る体言の〈量〉を限定する用法と例［07］のような〈蓋然性〉を表す用法をかねるものもある。

[06] 又大藩には、それ〜〵大きな学校が設立されて藩の子弟を教育した。其習ふものは第一に漢学で、其外には兵学武芸を修めたので、つまり文武両道を学んだので、此他には別に学術を授けたのではない、そして学問を修める者は大抵藩士乃ち今の士族である。（加藤弘之「維新前後の教育概況」、『太陽』第7巻2号、1901.2）

[07] 若し夫れ一定の地点に鉄道を敷設するに於ては、工事非常の困難であつて、巨額の経費を投入し、加ふるに其線路附近に於て、経済上の利益を獲得することが出来ない場合を除くの外は、大抵其敷設後二三年を出でずし

ろの無い御人物、さう云ふ方に対して我々などの心事を申上げるのは、実際恥入る次第で、（後略）」（尾崎紅葉『金色夜叉』後編、1897-1900、p.164）のように接辞的字音形態素「的」を含むものにも一部〈側面〉の例があるが、雑誌『太陽』のデータには「的」を含むもので〈側面〉を限定する例は見られなかった。

www.jstage.jp

て、忽ち収益を見ることが出来るけれども、（肝付兼行「筑港論」、『太陽』第7巻8号、1901.7）

4.2.3 陳述の副用語

〈和語の陳述の副用語〉

〈打ち明け〉	—
〈確信〉	きっと　かならず
〈仮定〉	もしも
〈感嘆〉	なんと
〈願望〉	こいねがわくは　どうか　どうにか　なにとぞ
〈疑問〉	豈　如何に　いつ　どうして　なぜ　なぜに　果たして
〈譲歩〉	如何に　いくら　たとえ
〈推量〉	おそらく　かならずや　さだめし　たしか
〈証拠付け〉	—
〈断定〉	—
〈説き起し〉	およそ　そもそも
〈比況〉	あたかも　いかにも　まるで
〈否定〉	必ずしも　少しも　ちっとも　どうしても　めったに…
〈評価〉	幸　幸に　幸にも
〈まとめ〉	—
〈予想〉	いっそ　かえって　さすが　さすがに　果たして　やはり
〈その他〉	いやしくも　主に　けだし　殊に　　とにかく

〈漢語の陳述の副用語〉

〈打ち明け〉	実は
〈確信〉	—
〈仮定〉	万一

www.kci.go.kr

〈感嘆〉	—
〈願望〉	是非　是非とも
〈疑問〉	一体　全体
〈譲歩〉	—
〈推量〉	多分
〈証拠付け〉	現に　事実
〈断定〉	断じて　当然　無論　勿論
〈説き起し〉	一体　元来　大体　全体　本来　由来
〈比況〉	—
〈否定〉	一向　決して　毫も　絶対に　全然　到底　別段
〈評価〉	—
〈まとめ〉	結局（は）　畢竟　要するに
〈予想〉	案外　案外に　意外に　存外
〈その他〉	特に

陳述の副用語の分類では次の例［08］と［09］の「一体」のように複数の意味・用法を持つものがある。例［08］の「一体」は文頭に立ち、ある説明を始める〈説き起こし〉の例であり、例［09］の「一体」は話し手の疑問に思う気持を強調する〈疑問〉の例である。

［08］一体現内閣乃ち伊藤内閣の施政上に就ては、吾輩は甚だ服せぬことが多い。又政府党たる政友会にも種々の情弊ありて実に吾輩の慨歎することが多いのであるが、而かも吾輩は其れにも拘らず増税案は今日の時局に其だ必要であると信ずるのである。（加藤弘之「貴族院の改造とは何ぞ」、『太陽』第7巻5号、1901.5）

［09］一体泣く国民と、笑ふ国民と、何れが国力を発揮して、有為の国民となるであらうか。是れが問題である。（著者未詳「健全なる歌」、『太陽』第7巻10号、1901.9）

和語と漢語の陳述の副用語の分類の比較では、両方に共通する意味・用法もあり、またどちらか一方にしかない意味・用法もある。〈確信〉〈感嘆〉〈譲歩〉〈比況〉

www.kci.go.kr

〈評価〉の意味・用法は和語の陳述の副用語にはあるが、漢語の陳述の副用語にはない。逆に、漢語の陳述の副用語にはあるが、和語の方にはない意味・用法には〈打ち明け〉〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉がある。要するに、和語の陳述の副用語と漢語の陳述の副用語はお互いに重なる意味・用法を持つ一方で、ほかの一方にない意味・用法をもう一方が補う関係にもあると考えられる。両方に共通する〈予想〉を表すものを例にすると、和語の〈予想〉を表すものには、話者の当初の予想に反して事態が展開することを表す「いっそ」「かえって」、話者の当初の予想に反しないことをほめて言い表す「さすが」「さすがに」、当初の予想どおりであることを表す「果たして」「やはり」などがある。一方の漢語の〈予想〉を表す副用語には「案外」「案外に」「意外に」「存外」があるが、「案外」「案外に」「意外に」「存外」は、事態が話者の当初の予想の範囲外であることを表すものであり、これは和語の〈予想〉の副用語では言い表せない部分である。

[10] 如斯く種々なる例証を枚挙すれば到底尽る瀬はない故に感動力といふものは医薬の力よりは案外に非常なる好結果を生ずるもので今日充分に研究するの必要はあるだらうと信じられる、（長田秋涛「精神と病との関係」、『太陽』第7巻7号、1901.6）

[11] 而して平時に於ては、人々株券を担保品として資金の融通を求むるから、制限外兌換券は出入常なくして、通貨は意外に膨脹し、忽ち物価に影響を与へ、貿易を逆勢に陥らしめて、財界を撹乱するものであるから、（後略）（園田孝吉「財界の不振と見返担保品制度」、『太陽』第7巻8号、1901.7）

5．和語副用語との比較から見た雑誌『太陽』の漢語副用語の性格

5.1 〈証拠付け〉の陳述の副用語

5.1以下では和語の陳述の副用語にはなく、漢語の陳述の副用語にだけある〈打ち明け〉〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉のうち、雑誌『太陽』に特徴的に見られる〈証拠付け〉〈まとめ〉〈断定〉を表す副用語のなかから主なものを取り上げ、その意味・用法について記述することにする[13]。

13）〈打ち明け〉の「実は」は、形成期のデータで小説91例、啓蒙書14例、小新聞7例、雑誌『太陽』3例、教科書1例で合計116例が見られるが、形成期のデータ全体から見ると雑誌『太陽』の例は少ないので、考察対象からは除いた。

www.kci.go.kr

雑誌『太陽』のデータの「現に」は、〈証拠付け〉の陳述の副用語と事柄の副用語の両方の例が見られる。例［12］の「現に」は「実際に」の意味で点線部分の述語を修飾する事柄の副用語である。

［12］斯く徳育問題は人生に至要なる問題であれば、徳育の方法に関しては、種々なる方案が種々なる論者によつて提起せられ、今日現に実行せられつゝある如き類も見受けるが未だ以て我が国徳育の方法は充分に具備して居るとは言はれぬ。（中島力造「人格の観念を基礎とせる徳育法」、『太陽』第7巻10号、1901.9）

例［13］と［14］の「現に」は修飾範囲が点線部分の文末に及び、具体例をあげ、先述の叙述内容を補足する陳述の副用語である。

［13］我国人は武士的精神の遺風として兎角権利のみを呼号して経済的眼光に乏しい様である、現に先年の条約改正に就ても唯治外法権の撤去のみに熱中して税権に注意しなかつた為め遂に今日の協定税率を見て居るのである、（佐々友房「満州問題」、『太陽』第7巻5号、1901.5）

［14］古来歴史を見ても、政事がよくなければ風俗が悪いのは普通でありまして、だから政事を改良せずしては風俗を改良することは出来ませぬ。現に一八二〇年頃の英国史を見ますと、当時ナポレオン一世の大敗後でありまして政治が紊乱致して居りましたが風俗も相伴ふて頽敗致して居ります。（西村茂樹「風俗改良問題（其二）」、『太陽』第7巻12号、1901.10）

「事実」は現代語では新聞などの文章でよく使われるが、雑誌『太陽』のデータでは2例が全部である。形成期のデータでも雑誌『太陽』の2例が全部であり、「事実」は近現代語形成期には現代語ほど一般的に使われる副用語ではなかったと見られる。「事実」も「現に」と同様、先述の叙述内容を裏付ける事例をあげ、先述の話者の判断を裏付けるはたらきをする。

［15］幼年者、即はち一定の年齢以下の者に、労働時間の制限を加へ、其身体の発育を害し、不治の病に陥らしめざる様に注意すといふが、是れは徒弟制度を新設するよりも、更に困難である。事実、法文に規定の標準を示したりとて、工場主が、其標準に従ふ如く装ひて、監禁同様の籠城法を取り、之を密閉して、外出せしめざる様のことあらば、低抗力なき幼年者は唯々として之に随ひ、如何なる標準に依りて、彼等が使役せられ居るかは、外面より之を知るの道なく、当局者と雖ども最も機敏なる警察の力を仮るに非ずんば、法律に違犯し居るや否やを知り得ざれば也。（国府犀東「工場法概言」、『太陽』第7巻10号、1901.9）

「現に」と似たような用法のものに「実際（は）」がある。以下の1960年代の小説[14]に見られる「実際（は）」の例は、「現に」と同様、〈証拠付け〉の副用語である。

www.kci.go.kr

[16] （前略）、謙介は自分自身、都心の一流劇場の舞台の上で、たといどんな端役であろうと、こうやって大観衆に向い合って立っているということが、いかにも不思議な、とても現実のこととは思えない心持になってきた。実際、つい四、五年まえには、こんなことになろうとは夢にだって考えられたものではない……。（安岡章太郎『幕が下りてから』、1967、p.9）

現代語では上記の例［16］のような〈証拠付け〉が「実際（は）」の主な意味・用法であるが、雑誌『太陽』を含む形成期のデータの「実際（は）」の用例はほとんど「本当に」の意味の事柄の副用語の例で、少なくとも近現代語形成期までには「実際（は）」は〈証拠付け〉の陳述の副用語としての用法はまだ定着しておらず、「本当に」の意味で述語を修飾する用法が中心的な用法であったようである。

[17] 或は役人が賄賂を取るといふ、また実際さう云ふ事も多少はあるかも知れぬ、然れども賄賂といふ意味が甚だ曖昧である、他人に或る事を依頼して、之が為に利益を得れば、それ相応の報酬をするのは当然で、（後略）（河瀬真孝「社会の腐敗救治意見（其二）」、『太陽』第7巻2号、1901.2）

形成期のデータで「実際（は）」（46例）が陳述の副用語で使われたのは2例あるが、その2例は以下の例を含め、同一の小説作品の例である。

[18] 女は果たして私に気が付いて居るのであらうか。どうも判然と確かめることが出来なかつた。明りがつくと連れの男にひそひそ戯れて居る様子は、傍に居る私を普通の女と蔑んで、別段心にかけて居ないやうでもあつた。実際其の女の隣にいると、私は今迄得意であった自分の扮装を卑しまないわけには行かなかった。（谷崎潤一郎『秘密』、1910、p.32）

「現に」と「実際（は）」は、本来「実際に」「本当に」の意味で述語を修飾する事柄の副用語から具体的な実例をあげることによって、前に述べられた叙述内容を裏付ける陳述の副用語へと、意味・用法が転成したものと言える。

5.2〈まとめ〉の陳述の副用語

「結局（は）」は、ある事態の時間的経緯の最後の局面を表す用法がある。

[19] 又其鉄道がパミール高原の方に向て居りて、露国はパミール高原を越ゆるか、又は迂回して支那土其機斯坦のカシガールまでも鉄道を延長せしむる積りであると見えます。而して更に其カシガールより支那までも鉄道を延長したならば、結局は鉄道を以て亜細亜大陸を横断することになります。露国人は既に是れ丈の大計畫を為して居るのであります。（戸水寛人「避擦国（楔子国）」、『太陽』第7巻6号、1901.6）

www.kci.go.kr

14）安岡章太郎『幕が下りてから』(1967)（『安岡章太郎集7』、1988、岩波書店）

以下の例［20］の「結局」は上記の本来の用法から転成して前に来る叙述内容を受けての話者の判断を結論的に示すものである15)。

［20］其時に当りて事大主義に富める朝鮮人は、露国人に服従して、日本人には帰服しない、夫れ故日本は朝鮮を取りたりとて、長へに之を維持することが困難であります。是によりて見れば、露国に満州を与へて、朝鮮を日本が取ると云ふ議論は断じて不可なりと信じます。結極私の考では、今日日本は非常の大決心を以て手を満州に伸ばし、之を踏台として大陸に進入することを以て、日本の心としなければなりません。是れ今日生存せる我々のみならず、子々孫々も亦斯の方針によりて、世界の侵略を計ることが宜しかるべしと思ひます。（戸水寛人「満州問題」、『太陽』第7巻5号、1901.5）

「畢竟」「要するに」も、例［21］で見るように前に来る叙述内容を短くまとめたり、または、例［22］のように先述の叙述内容をうけてそれに対する話者の判断を結論的に示すはたらきをする。

［21］また食事の終らぬ前に煙草を吸ふは無礼であるに邦人の内には多く是をやる人がある。また食事をする時左右に臂をのばして自分独り食するかの様な風をする人が有る。まだ例も多いが要するに凡て食事の礼は他をして不快の念を起さない様にするが礼である。（井上哲次郎「風俗改良問題（其二）」、『太陽』第7巻12号、1901.10）

［22］紳士の家庭が修らぬと云ふも、或は紳士が賭博などをやると云ふ様な不品行といふ事も、或は役人や議員が賄賂を取ると云ふが如き事も、皆な社会の腐敗であるが、其の中で主として賄賂の為に公益を犠牲にして私利を計る者が多いことが、最も弊害の大なるものであらう、因て今は専ら其事に就て言へば、此れは畢竟近来国務大臣の責任を世人が一般に軽視するに至つたからであると思ふ、（鳥尾小弥太「社会の腐敗救治意見（其二）」、『太陽』第7巻2号、1901.2）

5.3〈断定〉の陳述の副用語

〈断定〉の「当然」「勿論」「無論」は、それ以下の叙述を予想される範囲内のこととして断定して述べる話者の述べ方を表す。

［23］卑見を承知して居らるゝ諸君には不要のことであれども未だ承知せられぬ人には茲で少しく述べんければならんと思ふのであるが凡そ道徳を以て先天的に吾人の資性に賦与せられたもので吾人は当然之を直覚すべきものであると信ずる（加藤弘之「国際道徳の進歩し難き所以下」、『太陽』第7巻8号、

15）例［20］の「結極」は「結局」の異表記と考えられるが、『日本国語大辞典』では見当たらなかった。

www.kci.go.kr

1901.7)

[24] 然し当時は洋学を教授する学校などは殆ど無かつた只幕府の設立した開成所、（旧称蕃書調所）それから開明主義の大藩に二つ三つ洋学を教ふる所を開いた位の者であつた、無論学術を伝へる先生などは一人として無つた。（加藤弘之「維新前後の教育概況」、『太陽』第7巻2号、1901.2)

「勿論」と「無論」は、「言うまでもなく……である」という意味でほとんどその意味に差がないが、用方面では若干違いがある。「無論」とは違って、「勿論」は次の例［25］と例［26］で見るように、「勿論……が（けれども）、……。」または、「勿論……だ。しかし（しかしながら）、……。」で叙述が展開するパターンが多い。

[25] ソレからして今日の経済界が斯の如き変調に至つたのも、政府事業が余り膨脹し過ごした為めではないか、勿論民間でも随分無謀なことをしなかつたとは云へぬけれども、民間の事業は利益がなくなれば、勢ひ一時中止若くは全く止めなければならぬと云ふ傾きがある。けれども政府の事業は有る金を以て、利益があらうが、無からうが、ドシ～～約束通り遣ると云ふことに為るものやから、ドウしても之を止めると云ふことは出来難い、（園田孝吉「政府の新事業整理問題（続）」、『太陽』第7巻10号、1901.9)

[26] 勿論法令等のことはそれ～〝当局者があつて注意をすることでありますし又教育者たるものは其当局者に向つて建議なり議論なり又は決議なりして注意を求むることは勿論しなければならぬことであります併ながら法令が如何に完全であつても是は机の上に止ることであつて其実行が当を得なければならぬのであります。（菊地大麓「中学校に就て」、『太陽』第7巻9号、1901.8)

「勿論」は話者が判断を叙述する際、前もってその判断に反することがありうることを認めたうえで、話者の判断を展開する場合よく使用されている。「無論」と比較すると、「無論」はこのような用法で使われる例は少ない。すなわち、「勿論」は、「勿論……が（けれども）、……。」または、「勿論……だ。しかし（しかしながら）、……。」のパターンで使われ、後に叙述される話者の判断に注釈をつけることによって、最終的にその判断を補強するはたらきをする。

5.4 雑誌『太陽』に特徴的に見られる漢語副用語の性格

5.1から5.3までに述べた〈証拠付け〉〈まとめ〉〈断定〉の副用語に共通する特徴は、これらがある叙述内容を述べる際の話者の態度、つまり話者の述べ方にかかわるということである。さらに詳しくは、話者の判断を補強する〈証拠付け〉の副用語、先述の叙述を短くまとめたり話者の判断を結論的に示す〈まとめ〉の副用語、後続の叙述内容を予想される範囲内のこととして断定的に述べる〈断定〉の副用語は、前後する文にかかり、前

www.kci.go.kr

後する文の論理関係を明確にするはたらきをすると考えられる。これらの副用語のはたらきが一つの文に収まらず、前後する文の叙述にかかることは、以下の例から確認可能である。

[27] 且又現時の中学教育制度を改革した上に、専門学校の数を増加する方が宜しいのである。今日の所では、中学を卒業しても外に行くべき学校も沢山ないから、已を得ず大学或は高等商業学校に入学するのであります。（中略）夫れよりも寧ろ郷里に於て、郷里の学校に通学するなれば、学生は各其所を得る様になるので、格別其風儀は堕落せぬ様になるのであります。

之を要するに学校の教育制度に付ては、余は度々論じたことがあるから、茲に精しく細目に亘りて述べざる積りであるが、余の考では、何分現時の教育制度を改革しなければ、万事に就て不都合であるので、殊に学生風儀の堕落を防ぐに就て、最も必要であると信じます。（戸水寛人「教育制度一班」、『太陽』第7巻8号、1901.7）

例［27］の「之を要するに」は、「要するに」が一語の陳述の副用語として定着する前の段階の句の形式と見られるが、「之を」は前の叙述を指しており、前後する文の叙述にかかっていることが見て取れる。

以上で見たように、和語の副用語と比較した結果、雑誌『太陽』には文の前後の論理関係を明確にする漢語の副用語が多い傾向が見られた。この傾向は冒頭で述べた雑誌『太陽』の文体的特徴と関係すると見られる。冒頭でも述べたが、雑誌『太陽』の記事の多くは論説調のもので、著者の主張を効果的に伝えるためには前後する文の論理関係を明確にすることが求められ、そこに〈証拠付け〉〈まとめ〉〈断定〉の副用語が使用される必要性があったと考えられる。雑誌『太陽』に見られる漢語副用語の特徴が雑誌『太陽』の文体的特徴と関係することは、形成期のデータのほかのジャンルにおけるこれらの副用語の使用状況にも表れている。〈証拠付け〉〈まとめ〉〈断定〉の漢語副用語は全体的に、形成期のデータの日常語的な文章より雑誌『太陽』に集中的に使われている傾向が見られる。たとえば、形成期のデータの「当然」（5例）と「事実」（2例）の例は全部雑誌『太陽』の例であり、「要するに」（24例）は小説の6例以外は全部雑誌『太陽』の例、「結局（は）」（8例）のうち5例が雑誌『太陽』の例で、ほかのジャンルより雑誌『太陽』での使用頻度が高い。

ところで、前後する文の論理関係を明確にする漢語副用語のうち「結局（は）」（8例）「当然」（5例）などは、形成期のデータでは使用例も少なく、雑誌『太陽』に限定されて使われる傾向が見られる。ところが、「結局（は）」と「当然」は現代語では一般的によく使われる副用語であり、話し言葉でも普通に使われるようになっている。飛躍があるかも知れないが、近現代語形成期に比べると現代語では前後の論理関係を明確にする言い方が好まれ、話し言葉でもよく使われるようになったと言えるが、この点についてはさらなる調査と考察が必要であり、今後の課題として行きたい。

www.kigo.kr

6．まとめ

本稿では、雑誌『太陽』(1901) の漢語副用語と和語副用語をその意味・用法によって事柄の副用語、状況の副用語、陳述の副用語に分類・比較し、そこに見られる傾向について記述した。さらに、和語副用語にはなく漢語副用語にだけある〈打ち明け〉〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉の陳述の副用語のうち、〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉を表す主な漢語副用語についてその意味・用法を詳細に記述し、そこから雑誌『太陽』に特徴的に見られる漢語副用語の性格について明らかにした。その結果、雑誌『太陽』に特徴的に見られる〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉の漢語副用語は前後する文の論理関係を明確にするはたらきをすることを指摘した。そして、雑誌『太陽』に特徴的に見られる漢語副用語の性格は雑誌『太陽』の文章語的な文体と関係があることを指摘した。今後、近現代語における前後する文の論理関係を明確にする漢語副用語の使用状況について現代語の調査を補い考察して行きたい。

《近現代語形成期のデータの作品》

【小説】伊藤左千夫『野菊の墓』(1906)、尾崎紅葉『金色夜叉』前編、中編、後編(1897-1900、会話文だけを対象)、国木田独歩『武蔵野』のうち『河霧』『鹿狩』『まぼろし』『武蔵野』『忘れえぬ人々』の5作品(1901)、谷崎潤一郎『刺青』のうち『麒麟』『刺青』『少年』『秘密』『幇間』の5作品(1910)、夏目漱石『坊つちやん』(1906)、夏目漱石『吾輩は猫である』上編(1905)、二葉亭四迷『浮雲』第一編(1887)、第二編(1888)、第三編(1889)、山田美妙『夏木立』のうち『籠の俘囚』『玉屋の塵』『花の茨、茨の花』『柿山伏』『仇を恩』『武蔵野』の全作品(1888)、若松賤子訳『小公子』(1890-91) ＊以上の内、『浮雲』第三篇は早稲田大学図書館所蔵のマイクロフィッシュを使用し、ほかは近代文学館の復刻版を使用。

【教科書】文部省『尋常小学読本(イエスシ読本)』第一期(1904年より使用)
文部省『尋常小学読本(ハタタコ読本)』第二期(1910年より使用)
国立国語研究所国語辞典編集資料『国定読本用語総覧』1-3(1985、1987、1988)による。

【啓蒙書】加藤弘蔵『交易問答』(1869)早稲田大学中央図書館蔵、加藤弘之『真政大意』(1870)早稲田大学中央図書館蔵、福沢諭吉『学問ノスヽメ』(1872-76)進藤咲子編『学問ノスヽメ本文と索引』(1992、笠間書院)による。福沢諭吉『訓蒙窮理図解』(1868)『福沢全集第二巻』(1926、時事新報社)による。

【小新聞】『読売新聞[東京]』(1874年11月から1875年7月までの分)
国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを使用。欠落した日付や読み取り不可能な日付の分は除く。

www.kci.go.kr

【参考文献】

上野隆生(2007)「雑誌『太陽』の一側面について」、和光大学総合文化研究所年報『東西南北』2007, p.252。

工藤　浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」、『日本語の文法3モダリティ』、工藤浩・仁田義雄・森山卓郎編、岩波書店、pp.163-243。

国立国語研究所(1963)『話しことばの文型(2) 独和資料による研究』、pp.64-86。

_____(2004)『分類語彙表増補改訂版』、大日本図書、p.62。

_____(2005)『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究』、博文館新社、p.18。

趙　英姫(2002)「近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性」、『早稲田日本語研究』10、pp.87-98。

_____(2003)「近代語形成期における漢語副用語の修飾機能—漢語形容語を視野に入れて—」、『国文学研究』104、pp.12-22。

_____(2008)「近代語形成期の漢語副用語の概観」、『日本語学研究と資料』31、pp.1-13。

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』、くろしお出版，pp.201-206。

野村雅昭(1998)「現代漢語の品詞性」、『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』、汲古書院，pp.136-137。

前田富祺(1883a)「漢語副詞の種々相」、『副用語の研究』、渡辺実編、明治書院、pp.360-378。

_____(1883b)「漢語副詞の変遷」、『国語語彙史の研究』4、国語語彙史研究会、和泉書院、pp.189-231。

松村 明(1954)「東京語の成立と発展—現代の国語」、『国文学解釈と鑑賞』19-10、再収『増補江戸語東京語の研究』、1998、東京語出版、pp.87-103。

山田孝雄(1936)『国語の中に於ける漢語の研究』、宝文館、pp.205-276。

山田 厳(1983)『論集現代語研究15　現代語』、1983，有精堂、pp.241-247。初稿の出典は「発生期における的ということば」(1961)、『言語生活』120、筑摩書房。

渡辺 実編(1983)『副用語の研究』、明治書院、pp.1-69。

辞書類

『国語学大辞典』(1980)、国語学会編、東京堂出版

『三省堂国語辞典第六版』(2008)、見坊豪紀他、三省堂

www.kci.go.kr

要 旨

漢語は古くから日本語に伝わり、幕末・明治期を経て日本語に大量に流入され、今日にいたっては固有語の和語とほぼ同等の位置を占めるようになっている。本稿は、日本語の構文成分としての漢語の性質を明らかにしたいという問題意識から出発している。漢語は和語の助辞がついて（助辞がつかない場合も含め）日本語の構文成分となるが、特に構文成分としての機能の特徴を捉えやすいという理由で漢語副用語に注目した。

調査方法としては雑誌『太陽』(1901) から漢語副用語と和語副用語を採集し、両者を文中での意味・用法によって事柄の副用語、状況の副用語、陳述の副用語に分類・比較した。その主な結果を以下にまとめると、事柄の副用語の〈時間的進行の様子〉を表すものは和語副用語より漢副用語が種類が多様である。状況の副用語のうち、〈時〉を表すものは和語副用語より漢語副用語が種類が豊富であり、〈場所〉〈蓋然性〉の意味・用法は和語の状況の副用語にはなく、漢語の状況の副用語にだけ見られた。陳述の副用語の比較では、〈打ち明け〉〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉の意味・用法が和語副用語にはなく漢語副用語にだけあるという違いが見られた。そのうち、雑誌『太陽』に特徴的に見られる〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉の副用語は、ある叙述を述べる際の話者の述べ方を表すもので、特に前後する文の論理関係を明確にするはたらきをすることを明らかにした。また、〈証拠付け〉〈断定〉〈まとめ〉の漢語副用語は近現代語形成期のデータのほかのジャンルより雑誌『太陽』に集中的に使われる傾向が見られ、このような雑誌『太陽』の漢語副用語の特徴が、雑誌『太陽』の文章語的な文体と関係があることを指摘した。

キーワード：近現代語形成期、漢語副用語、和語副用語、事柄の副用語、
状況の副用語 陳述の副用語

투　　고	2010. 11. 30
1차 심사	2011. 12. 11
2차 심사	2011. 1. 08

www.kci.go.kr